

学校点描

校長先生が新人大会 41 枚の賞状と 6 枚のペナントの名前入れを夜遅くまで行っています。

《M中学校》

NO 7 H28. 9. 30

担当：教頭

28 日、本校会場で町内の小中学生のための芸術鑑賞教室を開催しました。本年度は和太鼓奏者 3 人による演奏です。さまざまな太鼓の音色と激しいリズムが体育館いっぱいに広がります。途中、小中学生もステージに上がって参加するコーナーもありました。参加希望を演奏者が募ると、機転を利かせて積極的に手あげ場を盛り上げる中学生たちがいました。

演奏が終了すると今度は進行の T・K 先生が機転を利かせて、3 名の演奏者にインタビューをしてくれました。

「あんなに連続して太鼓を打って手のひらはどうなっているのですか？見せてください」「たこやまめがあるのかなあと考えていましたが、とってもきれいですね。もう超越しているのでしょうか」と実際に手をみた報告。「もうひとつ、中学生もいますので、どうしてプロとして太鼓を打つ職業を選んだのか教えてください。」3 名とも小さなころから太鼓に親しんでいたことや、太鼓でどうしたらプロになれるのか考えたことなど紹介してくれました。その中で一人の演奏者の方は「僕はこの春に高校を卒業したばかりの 18 歳です。」場内がざわつきます。「太鼓は 3 歳から打っていましたが、太鼓を打つのが好きで、卒業前に何になろうかな？と考えたのですが、この仕事を選びました。中学生のみんなも、好きなことを見つけてがんばってください。」

同年代の若い演奏者の話を通して、“仕事を選ぶ”ということはどういうことなのだろうと、経験や知識がまだ少ない中学生たちはちょっぴり考えたことでしょう。

彼は誰（かたわれ）

休日は、久しぶりに映画を観に行きました。今、大変人気で興行収入が記録更新している映画を見ました。その映画を観た感想はやっぱよかったですね。エンドロールの間も言い知れぬ感動に酔います。この映画は、万葉集で使われている日本語の語源がストーリー全体を貫くテーマになっています。「たそがれ」と「かたわれ」という語源です。映画を見ながら、奈良時代の日本人がその言葉を作り上げた感受性の鋭さにすごく感じ入ってしまいました。

24 日（土）の地区新人陸上大会で先生方が手薄な日、2 年 B 組の朝の会と終わりの会に行って、思わず映画を観た感想を話しました。

文化庁が 2015 年度の国語に関する世論調査の結果を発表したニュースを目にしました。その結果、「ら抜き言葉」のうち「見れる」「出れる」という表現を「普段使う」と回答した人の割合が「見られる」「出られる」より多数派になったことがわかったそうです。一時期、「ら抜き言葉」に対して非難が沸き起こったことがありました。本来「食べられる」というべきところを、今時の若者は「食べれる」という具合に「ら」を抜いて言う、それが耳障りだと、主に年配の方から苦情が寄せられたのでした。この現象をとりあげ、日本語の乱れを嘆く向きも多かったものです。それが今では、誤った使い方の方が多数派に転じたというわけです。

24 日（土）は地区新人大会後期大会でした。陸上の選手たちは朝の 5 時 50 分に出発予定でし

たので、それに合わせて 4 時 30 分頃家を出ました。この時期のこの時間帯は、靄（もや）もかかりヘッドライトをつけて暗い中での運転です。学校に着くころようやく空が白みかけてきました。

今使っている黄昏（たそがれ）が実は「誰そ彼」から生まれたことを指摘したのは民俗学者の柳田国男だそうです。「かたわれ」という言葉も同じようなもので、「彼は誰」から転じた言い方であるとのこと。日が沈むころ、日が昇るころ、空が白みかけるころの時間帯は、あたりが薄暗くなるので、人々はすれ違うときに、「誰そ彼」つまり「あなたは誰ですか」と言い合いながら、コミュニケーションを図ったそうです。そこから、万葉のころは、日没時を「たそがれどき」「かたわれどき」というようになったというわけです。

「あなたは誰ですか？」そこにいるであろう姿が見えない人に聞く時間。日本語は人と人との出会いや別れから作られてきたことがわかります。誰もが聞きたいのは、「あなたはどんな人ですか？」そう聞かれても、なかなか、すっとは答えられません。Communication（コミュニケーション）の語源は“分かち合い”です。西洋ではそうなんですが、どうも日本語では違う感じがします。“あなたを信頼していいですか？”“まだあなたのことは全く知らない。でもなんとなく信頼していいですか。”そんな思いが会話の深層心理に持っているのが日本のコミュニケーションのような気がします。

学校は、そのもっとも激しくコミュニケーションが行われる場。自分も自分のことは知らない、でも信じられる相手を探したい。顔も姿もまだまだぼんやりとしか見えない、そんな“たそがれ”や“かたわれ”時期が学校時代なのかもしれません。

たとえ言葉は変化し続けても、『自分のことを理解し、あたなのことも理解したい』そんな日本流のコミュニケーションは永遠不変なのでしょう。

わたしのら抜き言葉や映画の感想の話も終わり、本日は昼上がりで一斉下校です。

「〇〇ちゃん、いっしょに帰れる？」（帰られる？）

「うん、帰れるよ！」（帰られるよ！）

思春期に時々訪れる“^{かた}彼は誰^れどき”、そんな時は、ら抜き言葉を軽快に使って、私の前から仲良く去っていく中学生を見つめます。

----- きりとりせん -----

ご意見・ご感想をお願いします。

Shinyatk1616n@yahoo.co.jp